

沖縄消化器内視鏡会

沖縄消化器内視鏡会 会長 奥島 憲彦



昭和38年に胃カメラ同好会として発足した沖縄消化器内視鏡会は、今年で48周年を迎えました。当初、開業医の先生方が中心となり人並ならぬ情熱で国内の一流の指導者を招聘し、技術の練磨を行い、当会を牽引してこられました。現在は、勤務医も多く参加し、会員数約150名になりました。本会のこれまでの活動を支えて下さった沖縄県医師会および会員の皆様に感謝申し上げます。

毎月、第四水曜日の午後19時半から21時に県医師会館で例会を行っています。毎回、当番の病院が2～3症例を提示し、参加した研修医から専門医まで含め会員皆で読影していきます。一例ごとに「悪性か、良性か?」、「上皮性か、非上皮性か?」、「病変の診断と鑑別すべき疾患」、「悪性なら深達度は?」、「その組織型は?」、「治療法は?」などについて参加者全員で検討します。研修医から指導医、部長など役職、年齢に関係なく自由に自分の意見を述べ合うことができるのも当会の特長の一つです。内視鏡像が中心ですが症例によっては上部消化管バリウム造影、注腸造影、超音波内視鏡、拡大内視鏡、CTなどの読影も加わります。基本的な読影の仕方を勉強できると同時にベテランの先生方の読影から「内視鏡写真からここまで読影することができるのか?」ということを学ぶことができます。前会長の慶田喜秀先生（前中部病院消化器内科部長）や副会長の金城福則先生（琉大光学診療部教授）や副会長の島袋隆志先生（島袋内科胃腸科院長）などベテランの先生方の経験談や一言が大変勉強になります。最後に出題者から治療法や病理組織学的診断について説明があります。典型的な症例も提示されますが、毎回必ずとっていいほど自分がこれまで経験したことがない珍しい症例が提示され、診断能の向上に役立っています。最近では、後期研修医の先生方の参加が増え、毎回熱のこもった例会となっています。時には、日常の診

療で診断や治療に難渋している症例を提示し他の施設の先生方の貴重なアドバイスを頂いています。また、時々会員によるスモールレクチャーを行い、専門領域のトピックについて講義をしていただいています。

また、年に一度の総会の際は特別講演を2題招聘し、up to dateな消化器内視鏡の診断や治療を勉強しています。今年度は平成24年2月18日（土）に県医師会館で予定しています。国立がんセンター中央病院内視鏡科グループ長斉藤豊先生による「大腸LSTの内視鏡治療—治療適応から合併症まで—」と早期胃癌検診協会常務理事の馬場保昌先生による「胃癌X線診断の求め方」を予定しています。会員外の先生方の参加も歓迎です。

また、5年に一度、沖縄消化器内視鏡会記念誌を発行し5年間の活動状況や業績をまとめています。45周年記念誌からは内容が日本医学中央雑誌にも登録されるようになりました。記念誌発刊に合わせて、毎回2つのテーマを設定し沖縄県の現状について全会員施設のデータをまとめ沖縄消化器内視鏡会として県医学会や学会で発表し記念誌に掲載しています。現在、県立南部医療センターの岸本信三先生を中心に「沖縄県のバレット食道」について、琉大病院光学診療部の金城渚先生を中心に「沖縄県の胃癌」についてワーキンググループができ、調査が行われているところです。会員の皆様もご協力のほど、どうぞよろしく願いいたします。

現在、例会は内科医と一部の外科医の参加がほとんどですが、消化器疾患に興味のある放射線科医や病理医や外科医、読影の基本を勉強したい研修医の皆様の参加を歓迎いたします。また、内視鏡診断や治療方針の選択に困っている消化器の症例がありましたら例会に積極的にもちいただきご提示ください。優先的に参加者全員で検討いたします。

沖縄県麻酔科医会の紹介



麻酔科医会会長 須加原 一博

さて、沖縄県医師会史2にも掲載した (p171) が、昭和62年琉球大学医学部に麻酔科学講座が開講され、初代奥田佳朗教授のもとに発足した沖縄県麻酔研究会 (昭和63年1月23日) が麻酔科医会の前身である。まだ麻酔科医が少なく、麻酔に携わる外科医や歯科麻酔医も加わり、沖縄県の麻酔科学の進歩と普及を目的に、研究会を作った。

麻酔科の啓発や研究会の更なる発展のために、平成4年度 (1992年、第6回総会) に沖縄県医師会医学会への加入を申請した。しかし、沖縄県医師会医学会の分科会としては、会員が「沖縄県医師会の会員」でなければならず、承認されなかった。沖縄県医師会加入の医師のみによる麻酔科医会として再度医学会分科会への加入を申請した。その会員数は31名 (麻酔科医21名) であった。そして、平成6年度 (1994年) より分科会として承認された。

麻酔科医会は、沖縄県麻酔研究会と協力して沖縄県の麻酔科学の進歩と普及を目的に活動している。発足当時は、会長：奥田佳朗、幹事は知念清、新崎康彦、櫻谷香織、花城久米夫、中原巖、太田敏久、事務局：平良豊、伊波寛と、現在沖縄県内で活躍の面々で組織された。平成12年 (2000年) 4月、サミット沖縄の時に奥田教授退職後、熊本大学より私が第2代目教授として赴任した。麻酔科領域の活性化を図るため、年1回であった研究会は平成13年度より年2回 (夏と春) 開催された。それまで琉球大学医学部で開催していたが、各関連病院の視察や交流も兼ね持ち回りで開催していくことにした。特別講演では、平成15年9月に、県立南部病院で開催、特別講演に島根医科大学麻酔科

教授齋藤洋司先生を招聘した。齋藤教授は、県立南部病院 (当時部長村田謙二、現久米島病院院長) の初代麻酔科部長であり、先生および病院関係者も再会を喜び感激した会となった。平成16年度からは、麻酔科学分野のみでなく集中治療分野へも寄与できるよう研究会を沖縄県麻酔・集中治療研究会と改称した。本研究会は沖縄県の若手医師の学会への登竜門でもあり、専門医取得前の医師に学会賞 (高嶺徳明賞) を設け活性化を図った。ご存知の先生も多いと思うが、高嶺徳明は、華岡青洲が日本で初めて全身麻酔下に乳がんの手術をした1804年より115年も前に全身麻酔で口唇裂手術をしたとの記録があり、琉大医学部構内には沖縄県医師会による顕彰碑が建てられている。このことは、アメリカの医学雑誌 Bulletin of Anesthesia History にもセントルイス大学の池田重政先生により紹介 (2011) されている。

平成20年3月には、新築された県立南部医療センター・こどもセンター (部長新崎康彦) で、病院視察を兼ね開催、平成21年2月には、同センター麻酔科部長新崎康彦先生の退職記念講演会を兼ね、新築の沖縄県医師会館で開催した。新崎先生から沖縄麻酔黎明期、小児麻酔の修得、伝達などの貴重な講演を聴き、会員に沖縄における医療の困難さおよび使命感を強く抱かせて頂いた有意義な会および懇親会となった。その他、新築の沖縄赤十字病院、大浜第一病院などホテル並みの会場で気持ちよく開催されている。

沖縄県麻酔・集中治療研究会の会員数は、年々増加し150名近くに達している。その他、沖縄県麻酔科医会として、沖縄MOF (多臓器

不全) 研究会、麻酔科学サマーセミナー、沖縄県敗血症研究会、麻酔の日、沖縄周術期管理セミナー、周術期循環管理セミナー、沖縄県ペインクリニック・緩和ケア研究会などかなりの研究会を開催している。このような活動が、沖縄県のペインや緩和を含む麻酔科の発展だけでなく、医療の質向上に寄与していると考えている。一般演題としてもかなり興味深い発表が多いのは毎回驚かされるが、この貴重な症例をできるだけ文章で残して沖縄から発信していくことが、沖縄県の麻酔科医会の課題であり、さらなる発展に繋がるものと考え活動している。

沖縄での活動などが認められ、日本臨床麻酔学会第31回大会を、2011年11月3日(木)～5日(土)の3日間沖縄コンベンションセンターにて開催させて頂いた。大会のテーマは、「臨床麻酔の新たな飛躍—アウトカムの向上を目指して—」とした(写真1)。現在、Outcome-Based Medicine に基づく質の高い臨床麻酔が求められている。アウトカム向上に関する講演やシンポジウムを中心に企画した。特別講演では、若き

研究者上田泰己氏と柳沢正史氏に生命予後に影響する遺伝子を含め最新知見を話して頂き、若い麻酔科医に研究に対する新たな興味と情熱を与えて頂き、大好評であった(写真2)。1,000題を超える一般演題を頂き、3,000名を超える会員に参加して頂いた。企業など関係者を含めると5,000名近くの参加者を得て盛会裡に終了できた。中国からも70名の医師に参加頂き、タクシー業界でこんな人の多い会ははじめてだったと今も噂になっていると最近タクシーに乗った教室員が笑顔で話してくれた。沖縄への経済効果も大きかったと喜んでいる。協力して頂いた麻酔科医会の先生方に感謝する。

最後になるが、沖縄県医師会からは、麻酔科医会に対して毎年貴重な助成金を頂き、支援して頂いていることに心より感謝申し上げるとともに、県医師会と協力・連携して、地域医療の向上に寄与できるよう活動していきたいと考えている。今後とも御指導の程よろしくお願い申し上げます。



(写真1)



(写真2)